

研究科内公募プロジェクト

コミュニティ・スクールにおける地域教材と地域が参加する カリキュラム形成

代表 堤 ひろゆき（基礎教育学コースD1）

森田 智幸（教職開発コース・日本学術振興会特別研究員DC D5）

内山 仁（教職開発コース D3）

江口 怜（基礎教育学コース M1）

扇澤 舞（基礎教育学コース M1）

邊見 信（基礎教育学コース M1）

指導教員 小国 喜弘（基礎教育学コース 准教授）

問題設定

学校開放・地域に開かれた学校づくり、学社連携・学社融合、学校を拠点とする地域（コミュニティ）の再生などの文脈において、学校と地域をめぐる議論や、独自の実践の蓄積がなされてきている。その中で、2004年に「開かれた学校づくり」を目指して行われた学校経営改革の一環としてコミュニティ・スクール（地域運営学校）の法制度化がなされた。学校の運営に地域住民の声を反映する制度を定めることで、地域と学校とを接続させることが目指されている。しかしながら、学校運営協議会に関する研究では、運営について議論が集中する傾向があり、学校と地域との協働による教材開発やカリキュラム形成についての議論が十分になされているとは言い難い。2009年度から先行実施されている新学習指導要領において、「地域学習」の重視がうたわれており、次期学習指導要領の改訂においても、地域と学校との協働による教材開発やカリキュラム形成に関する研究の蓄積が急務ともいえよう。まずこの点について、多様化する社会の中で運営のみならず地域の知と人材がどのように学校とかかわるのかに関する基本の方針を策定する必要がある。

加えて、地域における学校の重要性が非常に明確になった。学校と地域住民とが、どちらかに対

して一方的に協力を要求する関係が問い直され、学校と地域が協働と呼べる関係を構築していくことは喫緊の課題である。学校と地域との協働は学校における学びの問題として扱われることが必要であると言えよう。

上述の点から、学校と地域とは、子どもの学びを可能にしながら、継続的な関係をどのように構築できるのか、そうした関係はどのようなものなのかという問題を検討する。この問いに取り組むために、地域と学校との関わりを模索し追及した歴史的な事例、現在行われている実践事例では、カリキュラムをどのように捉え、形成しようとした／しているのかを内在的に検討する。従来のカリキュラムについて、佐藤学は、学習指導要領等で公的に制度化された「教育課程」（公的枠組みとしてのカリキュラム）と、学校や教室における「年次計画」「指導計画」などの、授業や学習に先立って定められた「プラン（計画）」（教師が作成する学校の教育計画としてのカリキュラム）として整理したⁱ。そこで、まずは計画としてのカリキュラム編成において地域住民がどのようにして参加できるのかを検討する。結論を先取りすれば、さらに、カリキュラムを制度的な観点に限定するのではなく、「学びの経験の来歴」ⁱⁱとして拡張する視点からの検討が必要である。これにより、教材開

発も含めたカリキュラム形成において学校と地域との関係に生じる今後検討すべき課題を提起し、その課題に向き合うときに有効な視座を明らかにすることが可能になる。

研究の概要

第1章で学校と地域とをつなぐための制度および政策論、第2章で学校と地域とをつなぐための歴史的な事例、第3章で現在の学校と地域をつなげる実践、を対象とし、各領域の中でのカリキュラムの扱われ方を整理した。

学校と地域をつなぐための制度である、学校運営協議会制度の成立過程とそこでの議論を中心に扱った第1章では、地域住民の参加の問題は運営に声を反映させる形をいかに整えるかが当初から主要な論点となっており、運営における関わりという意味で間接的なものに止まったといえよう。

具体的な地域住民と学校との関わりを考える上で、学校と地域住民が関わり合いを持つことが互いにどのような意味を持つかという点と、関わり合いを持つこと自体が目的化されるのではなく、互いにとっての意味を刷新し続けながら関係を持続していくためにはなにが必要かという点を検討する必要がある。現在における計画としてのカリキュラムを作る際の注意点やヒントを浮き彫りにするために、歴史的な事例として第2章においては戦後初期の地域教育計画を取り上げた。1950年前後に地域を学校に取り入れる試みでは、それに関わる大人たちにとっての意味は主題化されていなかった。それに対して現在は、現状の課題の解決に学習の力点が置かれているといえよう。

現在、学校と地域との協働という関係を構築するにあたって、可能となるカリキュラムについて、第3章では、現在における実践から、学校と地域との協働の構築に対するカリキュラム形成の視座を提示することを試みた。第3章において対象とするのは、「地域共生科」という教科を立ち上げた宮城県仙台市立七北田小学校の事例と、高知県南

国市立稲生小学校2年1組での読み聞かせ実践である。この2事例から、計画としてのカリキュラムが持つ実践の硬直化という問題と、カリキュラム「批評」のプロセスに地域住民も参加することで、子ども、地域住民の学びの概念を拡張することが可能になる。

今後の課題

今後の課題として、まず、制度として存在する学校と地域とのつながりの中で、運営面からカリキュラム形成に関わる具体的な方途を探ることである。次に、歴史的な実践の中に、学校と地域との協働を実現するような事例を検討する必要がある。さらに、現在の事例を検討するに当たっては、成功事例や失敗事例を含めて、より多くの事例を対象とした詳細な分析が必要となる。

加えて、カリキュラム形成という視点からは、広くカリキュラム概念の問い直しがまず行われなければならない。その上で、現在実施されているカリキュラム全体の中で、学校と地域がどのような関係として策定されているのか、学校と地域との協働を可能にするカリキュラムは、全体の中でどこに位置づくかを、検討する必要がある。これらは、今後取り組まれるべき課題であると考えられる。

ⁱ 佐藤学『カリキュラム批評——公共性の再構築へ——』（世織書房、1996年）pp. 4-5およびpp. 25-26。

ⁱⁱ 同書、pp. 3-5およびpp. 25-32。